

経済・金融 フラッシュ

鉱工業生産 10年10月

～5ヵ月連続の低下も、底打ちの可能性が高まる

経済調査部門 主任研究員 斎藤 太郎

TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

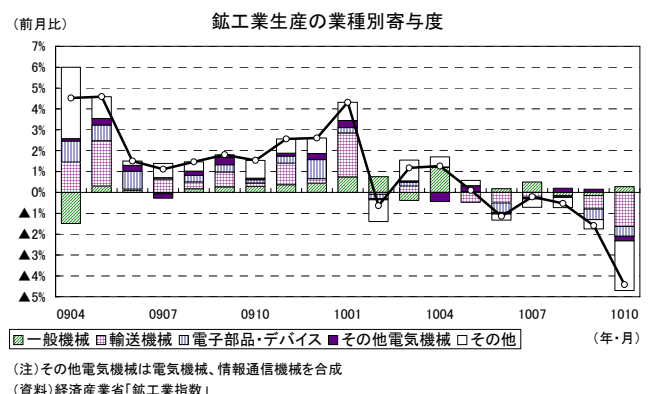
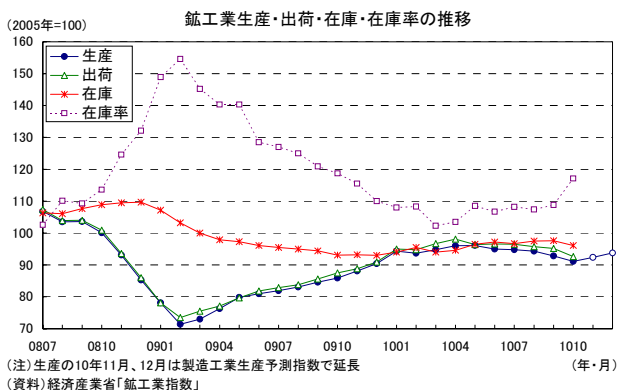
1. 鉱工業生産は5ヵ月連続の低下

経済産業省が11月30日に公表した鉱工業指数によると、10月の鉱工業生産指数は前月比▲1.8%と5ヵ月連続で低下したが、事前の市場予想(共同通信集計:前月比▲3.4%、当社予想は同▲4.4%)を大きく上回った。出荷指数は前月比▲2.7%と4ヵ月連続の低下、在庫指数は前月比▲1.5%と3ヵ月ぶりの低下となった。

10月の生産を業種別に見ると、エコカー補助金終了後に国内販売が大きく落ち込んでいる輸送機械が前月比▲10.0%とリーマン・ショック後以来の二桁のマイナスとなった。輸送機械だけで生産指数は前月比▲1.7%押し下げられた。なお、輸送機械の5月以降の減産幅(6ヵ月間の累積)は約2割となった。

それ以外の業種では、在庫の大幅な積み上がりから在庫調整局面入りしている電子部品・デバイスは前月比▲3.2%と5ヵ月連続で低下したが、設備投資の持ち直しを反映し一般機械が前月比3.8%と3ヵ月ぶりに上昇した。

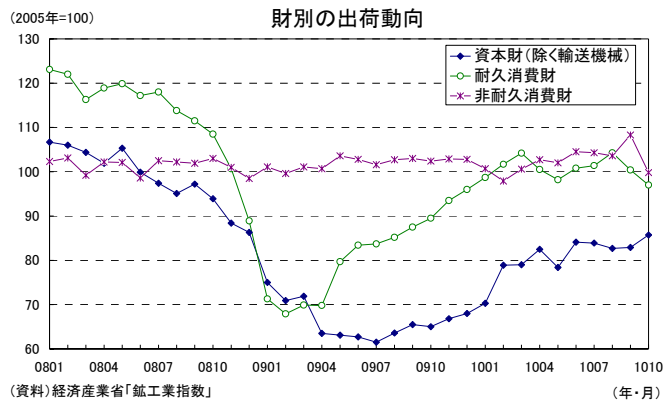
速報段階で公表される16業種中、12業種が前月比で低下、4業種が上昇となった。



財別の出荷動向を見ると、設備投資のうち機械投資の一致指標である資本財出荷(除く輸送機械)は4-6月期の前期比7.4%、7-9月期の同1.8%の後、10月は前月比3.4%となった。GDP統計の設備投資は09年10-12月期以降、4四半期連続で増加しているが、足もとも増勢基調が維持されていると考えられる。

一方、消費財出荷指数は4-6月期の前期比1.6%、7-9月期の同2.0%の後、10月は前月比▲4.8%

となった。耐久消費財（前月比▲3.4%）、非耐久消費財（前月比▲7.8%）ともに大きく落ち込んだ。耐久財はエコポイント制度の効果から液晶テレビの出荷が大きく伸びたが、輸送機械の急速な落ち込みがそれを打ち消した。GDP統計の民間消費は7-9月期には前期比1.1%の高い伸びとなったが、10-12月期は反動減を主因として大幅なマイナスが避けられないだろう。



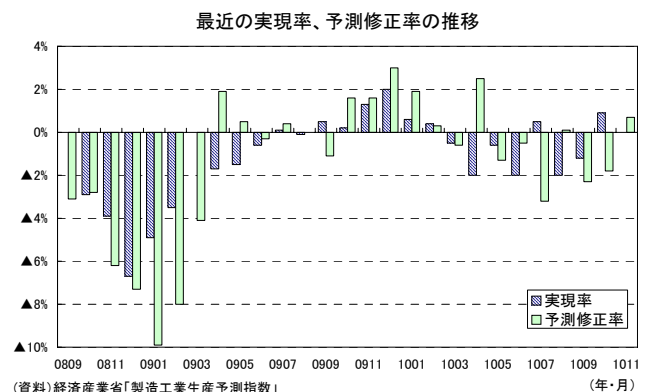
IT関連業種（電子部品・デバイス、情報通信機械）では在庫の大幅な積み上がりが続いてきたが、10月の在庫指数は電子部品・デバイスが前年比32.5%（9月：同37.8%）と高止まりが続く一方、情報通信機械は前年比46.2%（9月：同109.7%）と増加幅が大きく縮小した。ただし、情報通信機械は12月以降のエコポイント制度の縮小（ポイント数約半減）を控えた駆け込み需要により、液晶テレビの販売（出荷）が急増している影響が大きいと見られ、再び在庫が積み上がるリスクもあるだろう。

2. 10-12月期は減産不可避も年内には底打ちの公算

製造工業生産予測指数は、11月が前月比1.4%、12月が同1.5%となった。生産計画の修正状況を示す実現率（10月）、予測修正率（11月）はそれぞれ0.9%、0.7%となり、ともに3ヵ月ぶりにプラスとなった。生産計画を下方修正する動きが止まったことは、最終需要の落ち込みが企業の想定範囲にとどまってきたことを示唆しており、生産の先行きを見る上で明るい材料と言える。

予測指数を業種別に見ると、大幅な減産を続けてきた輸送機械は11月が前月比3.7%、12月が同5.6%と明確な増産計画となっている。あくまでも計画段階の数字だが、10月の実現率、11月の予測修正率がともに▲0.5%と小幅なマイナスにとどまったこと、国内販売急減により懸念されていた在庫の大幅な積み上がりが回避されていること（10月の在庫指数は前月比▲10.8%、前年比4.4%）などから判断すれば、生産の足を大きく引っ張ってきた輸送機械は年内に底打ちする可能性が高いだろう。

10月の生産指数を11月、12月の予測指数で先延ばしすると、10-12月期の生産指数は前期比▲▲1.7%の低下となり、鉱工業生産が2四半期連続で減産となることはほぼ確実であるが、月次ベースでは年内に底打ちすることが見込まれる。足もとの景気は足踏み状態にあるが、本日の鉱工業生産の結果からは、今年度中には足踏みを脱する可能性が高まったと判断される。



（お願い）本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。